

第10回

森里海

シンポジウム報告書

身近な自然を見つめなおす

～ネイチャーポジティブの実現に向けて～

(シンポジウムプレ企画) 高校生森里海研究ポスターセッション

VISUAL REPORT



AEON
イオン環境財団



第10回 森里海シンポジウム 報告書

身近な自然を見つめなおす～ネイチャーポジティブの実現に向けて～ VISUAL REPORT

2026年8月 発行

発行 京都大学フィールド科学教育研究センター

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

冊子デザイン・印刷・製本 un:que アンク 川勝雪貴

日時：2026年3月25日（水）10：00～16：15

会場：京都大学北部総合教育研究棟 益川ホール

主催：京都大学フィールド科学教育研究センター
公益財団法人イオン環境財団

共催：JST 共創の場形成支援プログラム COI-NEXT

「ゼロカーボンバイオ産業創出による資源循環共創拠点」（JPMJPF2114）

後援：京都大学生態学研究センター、京都大学野生動物研究センター
京都大学地球環境学堂・学舎

目次 Contents

はじめに	1
新しい里山・里海 共創プロジェクトの紹介	2
シンポジウム「身近な自然を見つめなおす～ネイチャーポジティブの実現に向けて～」	
基調講演『『環境ものさし』で測る身近な生態系』 浅野 悟史	3
講演「森を織る～日本の絹織物文化の世界発信で社会を再生する～」 小森 優美	4
講演「飼料残渣の竹の、魚礁としての活用 ～白浜町アドベンチャーワールドパンダバンブープロジェクト～」 山守 瑠奈	4
講演「環境 DNA で生物多様性を知る、伝える ― 河川と里海の現場から」 八柳 哲	5
講演「みんなの取組が未来をつくる～世界や国の目標達成に向けて～」 辻田 香織	5
質疑応答・パネルディスカッション	6
シンポジウムプレ企画 高校生森里海研究ポスター発表会	7
2-1 北海道釧路湖陵高等学校	8
2-1 和歌山県立海南高等学校	17
2-2 東京都立八王子東高等学校	9
2-1 1 広島県立広島国泰寺高等学校	18
2-3 神奈川県立生田高等学校	10
2-1 2 広島県立広島高等学校	19
2-4 岐阜県立吉城高等学校	11
2-1 3 島根県立益田高等学校	20
2-5 石川県立七尾高等学校	12
2-1 4 山口県立徳山高等学校	21
2-6 京都府立海洋高等学校	13
2-1 5 愛媛県立西条高等学校	22
2-7 京都府立宮津天橋高等学校	14
2-1 6 福岡県立伝習館高等学校	23
2-8 京都府立西舞鶴高等学校	15
2-1 7 福岡県立山門高等学校	24
2-9 京都府立洛西高等学校	16
高校生と大学生による「森里海交流会」	25
アンケート	26
おわりに	28

プログラム（当日のタイムテーブル）

午前の部（高校生森里海研究ポスターセッション） 司会：市川 光太郎（フィールド研准教授）

9:30 ～	受付開始
10:00 ～ 10:10	開会挨拶、趣旨説明 徳地 直子（フィールド研教授）
10:10 ～ 11:20	ポスター発表 17校（順不同） 北海道釧路湖陵高等学校、東京都立八王子東高等学校、神奈川県立生田高等学校、岐阜県立吉城高等学校、石川県立七尾高等学校、京都府立海洋高等学校、京都府立宮津天橋高等学校、京都府立西舞鶴高等学校、京都府立洛西高等学校、和歌山県立海南高等学校、広島県立広島国泰寺高等学校、広島県立広島高等学校、島根県立益田高等学校、山口県立徳山高等学校、愛媛県立西条高等学校、福岡県立伝習館高等学校、福岡県立山門高等学校
11:20 ～ 12:00	ディスカッション

午後の部（シンポジウム「身近な自然を見つめなおす～ネイチャーポジティブの実現に向けて～」） 司会：横部 智浩（フィールド研特任助教）

13:00 ～ 13:05	開会挨拶、趣旨説明 館野 隆之輔（フィールド研センター長）
13:05 ～ 13:10	開会挨拶 山本 百合子（公益財団法人イオン環境財団 専務理事兼事務局長）
13:10 ～ 13:50	基調講演『『環境ものさし』で測る身近な生態系』浅野 悟史（地球環境学堂准教授）
13:50 ～ 14:05	休憩
14:05 ～ 14:20	講演「森を織る～日本の絹織物文化の世界発信で社会を再生する～」小森 優美（株式会社森を織る・代表取締役）
14:20 ～ 14:35	講演「飼料残渣の竹の、魚礁としての活用～白浜町アドベンチャーワールドパンダバンブープロジェクト～」山守 瑠奈（フィールド研助教）
14:35 ～ 14:50	講演「環境 DNA で生物多様性を知る、伝える ― 河川と里海の現場から」八柳 哲（フィールド研特任助教）
14:50 ～ 15:50	講演「みんなの取組が未来をつくる～世界や国の目標達成に向けて～」辻田 香織（環境省自然環境局課長補佐）
15:05 ～ 15:15	ポスター賞表彰
13:15 ～ 15:25	休憩
15:25 ～ 16:05	質疑・パネルディスカッション
16:05 ～ 16:15	開会挨拶 益田 玲爾（フィールド研副センター長）

はじめに



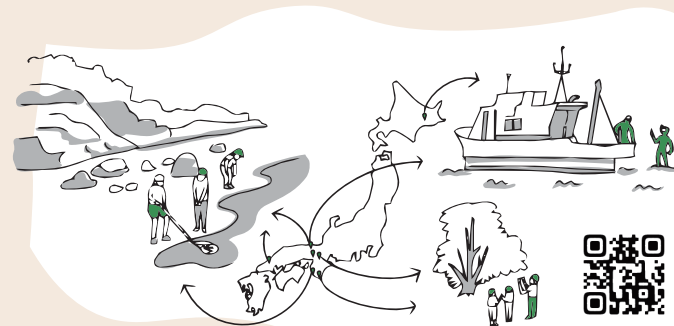
京都大学フィールド研
センター長 館野 隆之輔



公益財団法人イオン環境財団
専務理事兼事務局長 山本 百合子

2026年3月25日（水）に京都大学北部総合教育研究棟において、第10回森里海シンポジウム「身近な自然を見つめなおす～ネイチャーポジティブの実現に向けて～」が開催されました。プログラムでは、環境評価の指標となる「環境ものさし」に関する基調講演のほか、日本文化である絹織物に関わる一連の産業を世界へ発信する取り組みやネイチャーポジティブに向けて中心的な役割を担っている環境省の取り組み、また両主催者が4年間取り組んできた「新しい里山・里海 共創プロジェクト」の成果報告が行われました。また、午前中にはプレ企画として、全国17校の高校生70人が、里山・里海をテーマとした日頃の研究成果の発表を行いました。高校生たちも、第一線で活躍する若手研究者の講演に触れたり、他校の生徒と活発に意見を交わしたりすることで、大きな刺激を受けたのではないのでしょうか。本報告書では、さまざまな地域や世代の皆様と共に身近な自然の在り方を考える中で、ネイチャーポジティブを実現するための新たな視点を提示します。

私たちがこうして集う今も、世界に目を向けると戦争が起きています。環境破壊の最大の原因は、戦争だと思います。戦争では、一瞬で人や動植物の命が奪われてしまいます。今回はネイチャーポジティブをテーマに、人間と動植物、そして様々な自然を含めて、どうすれば共存共栄していけるのかを、多世代で共に考え、語り合いました。人の目線で自然を見るのではなく、自然や動植物の目線から人間を見るということも、一緒に考える時間となったのではないのでしょうか。国籍や世代、生活環境によらず、誰もが平和で豊かに暮らせる社会を目指す「Environmental Justice」の考え方も、大切な視点のひとつです。午前中は皆さんの発表から多くの気づきがあり、午後は、専門家や行政の方から貴重なお話を伺いました。全国から集った皆さんの出会い、そして今回の実りある時間を、今後の糧にさせていただくことを願っています。



<https://fserc.kyoto-u.ac.jp>

森里海連環学って？

日本は海に囲まれた森の国です。そのような特色を持つ日本では、森から海までの健全な生態系のつながりが、川や海における生物生産はもちろんのこと、地域の振興や人々の安全で安心な暮らしにとっても極めて重要です。このような観点から、フィールド研では健全な生態系連環の再生に焦点を当てた「森里海連環学」を提唱してきました。森里海連環学は、自然の仕組みと人間活動のつながりの重要性を調べ、人類の持続可能な幸せのために何をすべきかを研究し社会で実践する、自然科学と社会科学の多様な分野を統合した学問領域です。



新しい里山・里海 共創プロジェクトって？

京都大学フィールド研および公益財団法人イオン環境財団により2022年度からスタートしたプロジェクトです。本事業では、森里海連環学に基づく新しい里山・里海の共創に向けた教育・研究・社会連携活動を進めていきます。新しい里山・里海の多様なあり方を提案し、里山・里海に関わる地域の方々が、研究者等と協働しプロジェクトから得られる科学的な知見を活用して、自立的・持続的な活動を共に創り出せるシチズンサイエンスの場となることを目指しています。



<https://collabo.fserc.kyoto-u.ac.jp>

新しい里山・里海 共創プロジェクトの紹介

京都大学フィールド研 特任講師 田中 拓弥

「新しい里山・里海 共創プロジェクト」は、公益財団法人イオン環境財団の支援を受け、2022 年度から京大フィールド研と同財団が実施してきた事業です。里山・里海に関わる多様な方々と連携しながら、大きく 3 つの活動に取り組んできました。

一つめは、里山・里海の「現状を知る」ための研究や調査手法の開発です。全国の里山土壌の市民調査、環境DNAを用いた川・海のつながりに関する研究、社会調査による里山保全活動団体の研究を行ってきました。

二つめは、「モデルとなる里山・里海をつくる」取組です。舞鶴水産実験所、上賀茂試験地、瀬戸臨海実験所というフィールド研の3施設の特徴を活かして、個人・団体や自治体・企業等の地域のステークホルダーと活動してきました。舞鶴水産実験所では、舞鶴周辺の自然をフィールドに、海・川の生き物と森・人の関わりについて学ぶ機会を提供しました。上賀茂試験地では都市近郊という立地を活かして、大学の森で里山活動を体験するオープンな場を作りました。瀬戸臨海実験所では、無人島・島島でのビーチクリーン活動を通じて、里海の自然や海洋漂着ごみなどの環境問題について学ぶ機会を創っています。

三つめは、「新しい里山里海を創る人たちとつながる」取組です。オンラインでの勉強会を開いて、里山・里海での研究・実践のお話を聴いたり、希望者による意見交換を行いました。近隣のイオンモールでは、「里山里海つながるフェス」を開催し、地域の里山団体と関係組織の発信や交流を応援しました。また、国連大学での「イオン SATOYAMA フォーラム」では、里山をテーマとする大学が合同で発信し、取組をアピールしてきました。今回の「森里海シンポジウム」もつながる取組の一環として実施しています。

このように、本プロジェクトでは、「森里海連環学」の視点で得たフィールドの知見を紹介しつつ、様々な世代の多様な方々とお話をしながら、新しい里山・里海について一緒に考えてきました。こうした取り組みを通じて、里山や里海、そして森里海のつながりに関心を持つ人が増え、行動の変化にもつながっていくことを願っています。

—— 新しい里山・里海 共創プロジェクトで実施した様々な取組 ——



池内川での魚の観察 / 舞鶴水産実験所



里山おーぷんらぼの活動 / 上賀茂試験地



海岸でのビーチクリーン活動 / 瀬戸臨海実験所

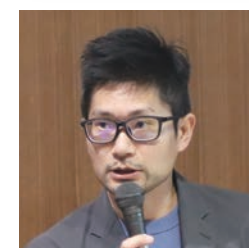


「新しい里山・里海 共創プロジェクト」の
最新情報や過去のレポートは、
公式ウェブサイトをご覧ください。
<https://collabo.fserc.kyoto-u.ac.jp/>

基調講演「『環境ものさし』で測る身近な生態系」

「生物種の急速な絶滅」は地球環境問題のなかでも、もっとも深刻なもののひとつとされています。地球規模でのダメージの深刻さ、そして回復の難しさにおいて、気候変動を上回る問題といえます。近年、この生物多様性の低下を回復に転じようとする「ネイチャー・ポジティブ」というスローガンが掲げられるようになりました。しかし、気候変動、とりわけ温室効果ガス削減と異なり、各地域共通の目標を設定しにくい特徴があります。むしろ、この地域差を活用して地域のにぎわいを取り戻したり、地域の皆さまが納得して楽しみながら地域の生態系を見守っていける指標にできないでしょうか。私はこれを「環境ものさし」として提案し、協働研究の事例を重ねてきました。

今回は、滋賀県甲賀市での冬みず田んぼにおける「ニホンアカガエル」の卵塊数調査や、岐阜県飛騨市の広葉樹林を主とした森林において「ルリクワガタ類」を森林管理の指標とした調査、パナソニックとの共同研究での「モズのはやにえ」を指標に用いた調査などの事例紹介を行い、「環境ものさし」の候補さがしと使い方について発表を行いました。「環境ものさし」をきっかけに、地域独自の創意工夫によって保全活動のPDCAサイクルを回していくことが期待されます。



京都大学地球環境学堂 准教授
浅野 悟史

本シンポジウムでは、講演内容をよりわかりやすく伝え、理解を深めるため、グラフィックレコーディングを導入しました。講演や対話の要点を図やイラストを交えてリアルタイムに描き起こしていくため、その場にいる参加者と内容を即座に共有することができ、議論や対話の創発に役立ちます。本報告書では、各講演の記録とあわせて掲載していますので、ぜひ文章とともにご覧ください。

講演「森を織る～日本の絹織物文化の世界発信で社会を再生する～」

日本各地に受け継がれてきた絹織物文化は、産地の衰退や担い手不足により危機に直面しています。本講演では、株式会社森を織るの取り組みを通じ、養蚕・製糸・織り・染めといった分断された工程を再びつなぎ、文化と生態系を一体で再生する実践を紹介しました。京都を拠点に映画、ツーリズムやワークショップ等で国内外へ本取り組みを発信し、体験や観光と結びつけることで新たな価値を創出する可能性を提示しました。今後も私たちは人と自然、地域を結び直し、持続可能な社会を作る手段の一つとして、文化を発信していきます。



小森 優美
株式会社 森を織る 代表取締役



講演「飼料残渣の竹の、魚礁としての活用 ～白浜町アドベンチャーワールドパンダバンブープロジェクト～」

和歌山県白浜町では、パンダの高い飼育実績を誇るアドベンチャーワールドが、飼料残渣の竹のアップサイクルとして竹を様々な活用する「パンダバンブープロジェクト」に取り組んでいます。本講演では、そのプロジェクトの一環として京都大学白浜水族館が共同で取り組んでいる、「竹の魚礁としての活用」について、2025年度の成果を解説しました。本年は竹魚礁の海洋生態系に及ぼす影響を、環境DNAを用いて①イカの産卵床としての効果、②魚のすみかとしての効果の2点を評価しました。また、直接観察によって③底生生物の生活基盤としての効果を評価しました。結果、竹魚礁はイカの産卵床としてはとても高い効果を持つほか、底生生物も多数身を寄せる場となっていることがわかりました。



山守 瑠奈
京都大学フィールド研 助教



講演「環境DNAで生物多様性を知る、伝える ― 河川と里海の現場から」

森里海の水圏生物の多様性を把握するには河川・河口・海域の一体的な調査が不可欠ですが、従来手法では多大な労力とコストを要します。そこで、水を汲んで調べるだけで生物の生息状況がわかる「環境DNA技術」を活用し、森里海のつながりを捉えるべく調査を行ってきました。本シンポジウムでは特に京都府舞鶴市・伊佐津川水系での事例を挙げ、行政や住民との成果共有を通じた保全啓発活動についても紹介しました。こうした環境DNAによる生物多様性の「見える化」を核とした地域協働、およびその積み重ねによる集合知の構築は、ネイチャーポジティブ実現に向けた重要なステップになると期待されます。



八柳 哲
京都大学フィールド研 特任助教



講演「みんなの取組が未来をつくる～世界や国の目標達成に向けて～」

自然は暮らしを支える基盤です。世界の総GDPの半分以上は自然資本と生態系サービスに依存する産業から生み出されているとされています。しかし、世界的にも、日本においても、生物多様性の損失と生態系サービスの劣化が進んでおり、世界の自然資本は30年間で28%減少したとの報告もあります。こうした深刻な状況を踏まえ、2030年までに生物多様性の損失を止め、反転させること、いわゆるネイチャーポジティブが世界共通の目標になっており、2030年までに陸と海の30%以上を保全すること（30by30）を目指した取組などが進められています。世界目標の達成には、個人や企業を含め多様な主体がともに行動することが不可欠です。個人では、自然について学び、環境に配慮した商品を選び、地域の自然を調べ、保全に関わることが重要です。自然豊かで人が健やかに生きる社会は、一人ひとりの行動の積み重ねによってこそ実現されると考えています。



辻田 香織
環境省 自然環境局 自然環境計画課 課長補佐



森里海シンポジウムパネルディスカッション

講演のあと、登壇者と司会者がステージに上がりパネルディスカッションを開催しました。会場から寄せられた様々な質問に対し、登壇者が一つひとつ丁寧に回答しました。高校生からも沢山の質問が出て、登壇者と参加者の距離が縮まる活気に満ちた質疑応答の時間となりました。



シンポジウムプレ企画

高校生森里海研究ポスター発表会

京都大学フィールド科学教育研究センターは、高校と大学をつなぐ高大連携事業を積極的に推進しており、全国の高校による研究活動を支援しています。午前中のプレシンポジウムにおいては、全国17校の高校生がそれぞれの地域における身近な自然に関する研究活動を報告し、研究者や来場者と活発に議論しました。審査にあたっては、研究計画及び考察、メッセージ性・パッション、ポスターデザイン、森里海連環の説得力、そして発表技術という5つの観点から評価が行われ、優れた発表にはその内容に応じて「森賞」「里賞」「海賞」「イオン環境財団賞」が授与されましたが、里賞についてはどちらも甲乙つけがたかったため、2校が同時受賞となりました。また、参加者の投票で最多得票を得た学校には「オーディエンス賞」が贈られました。

◎ 内容にご関心のある方は QR コードを読んで、下記ウェブサイト上のポスター（PDF）をご覧ください。

高校生森里海研究ポスター発表会
<https://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/blog/archives/39795>



森賞 福岡県立山門高等学校	里賞 東京都立八王子東高等学校	里賞 石川県立七尾高等学校	海賞 広島県立広島国泰寺高等学校
イオン環境財団賞	愛媛県立西条高等学校	オーディエンス賞	岐阜県立吉城高等学校



神奈川県立生田高等学校



フルボ酸鉄は地球の救世主になり得るか！？

亀山 紘一 白戸 恵輔 稲垣 颯大



ポスターの PDF
はこちら

岐阜県立吉城高等学校

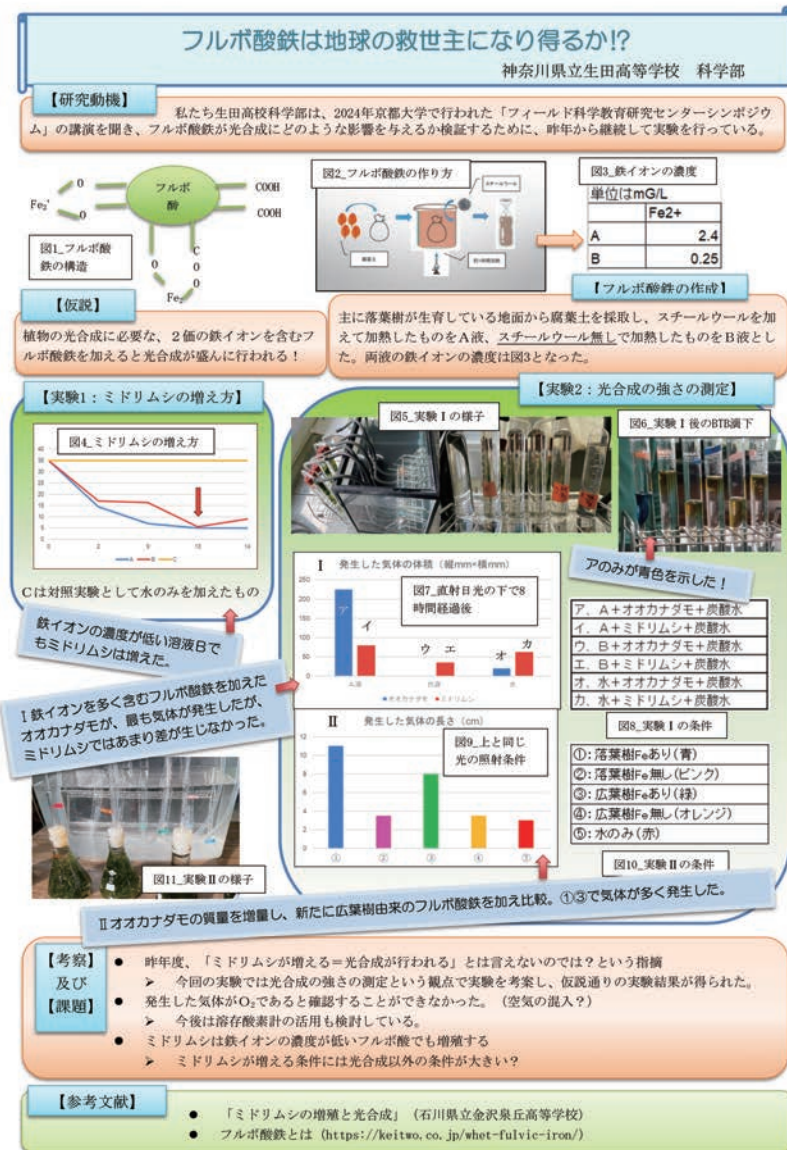


カメムシ撃退大作戦！

島田 俊亮 佐藤 笑有佳 森本 真帆
間所 幸生 岩佐 聡大



ポスターの PDF
はこちら

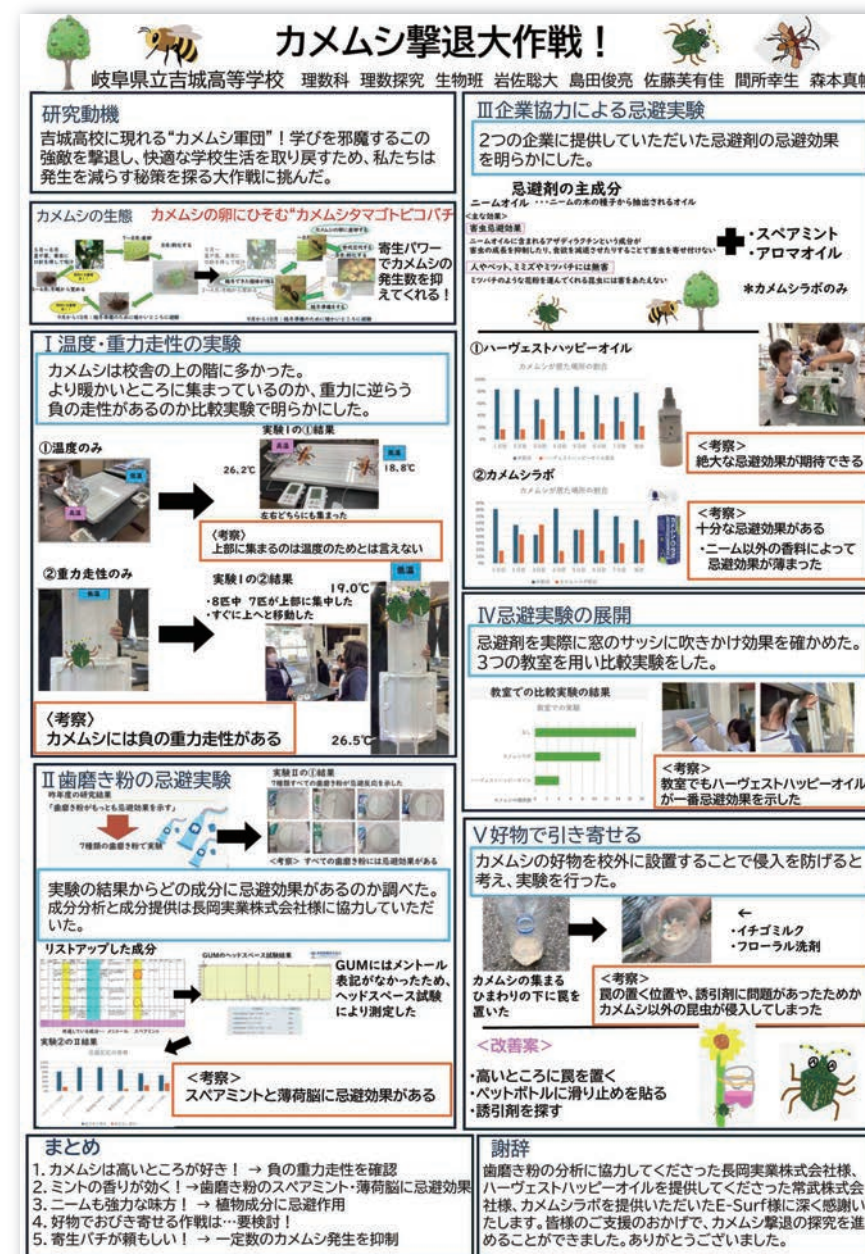


教員からのコメント

・フルボ酸鉄が植物プランクトンに及ぼす影響を実験で検証した興味深い研究でした。実験条件も多く、熱意が感じられ、高く評価できます。一方で、実験Ⅰ・Ⅱの方法や結果の説明がやや不足しており、図の軸の意味や炭酸水・BTB液を用いる理由、落葉樹と針葉樹を比較する目的などを補足すると、研究内容がより理解しやすくなると思います。

・フルボ酸鉄の影響は水温によって大きく変化するため、水温条件を統一し、その条件を明記すると研究の信頼性がさらに高まると感じました。あわせて、鉄と植物プランクトンに関する先行研究も参考にすると、さらに考察が深まると思います。

・ポスターでは、フルボ酸の生成過程や鉄と結合して植物に吸収され、光合成を促進する仕組みを冒頭で説明し、実験方法を結果の前にまとめて示すと、研究全体がより理解しやすくなると思います。



教員からのコメント

・とても興味深く、楽しく聞かせていただきました。今後は、カメムシを環境の指標として捉える視点も面白いと感じます。年による発生量の違いや、その要因、またカメムシの多寡が環境の良し悪しをどのように示すのかについても検討すると、さらに発展的な研究になると思います。

・カメムシの生態、行動を調査し、複数の材料を使った忌避実験等を行いました。多様な角度からカメムシ対策を検討し、大変面白い研究だと思いました。

・研究目的が明確で、研究設計や発表も大変分かりやすく、完成度の高い内容でした。効果検証も丁寧に行われており、ハーヴェストハッピーオイルが今後活用されることを期待しています。一方で、カメムシが集まる要因として光走性についてもあわせて検討すると、さらに包括的で完成度の高い研究になると感じました。今後のさらなる発展を楽しみにしています。

石川県立七尾高等学校

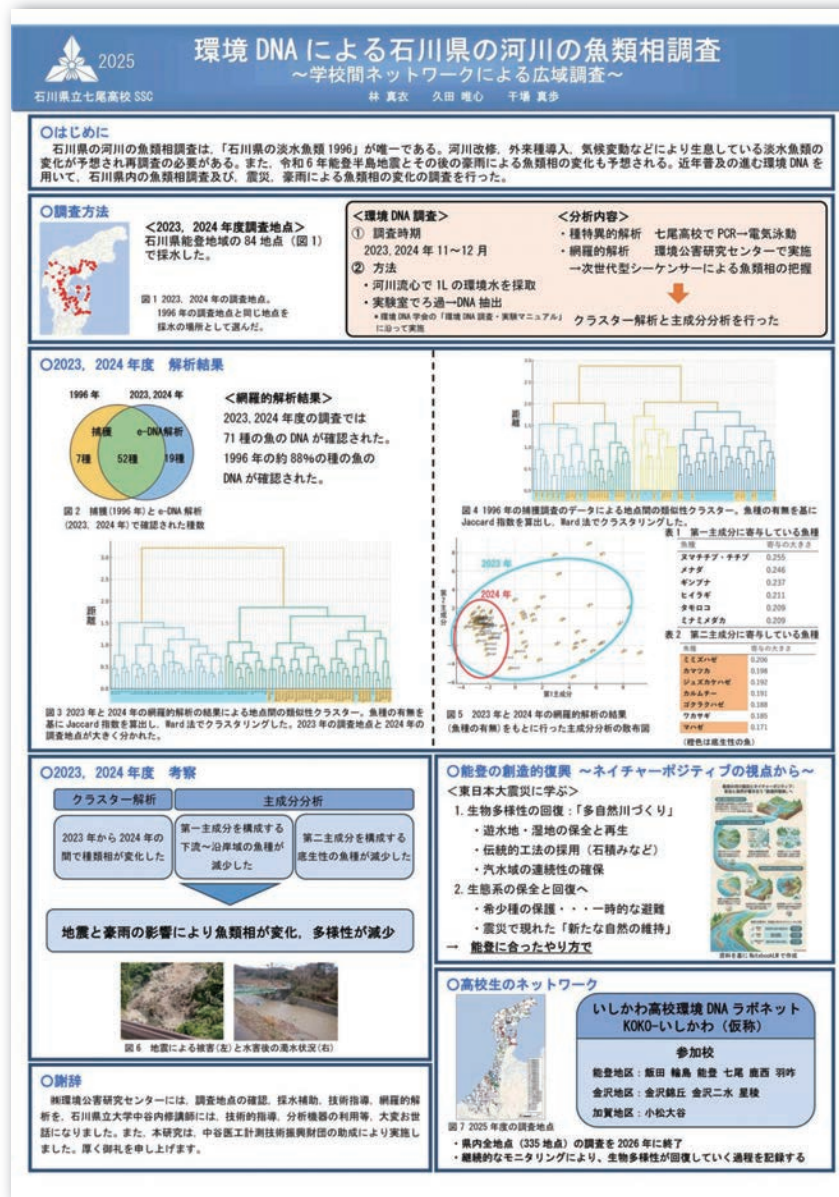


環境 DNA による石川県の河川の魚類相調査 ～学校間ネットワークによる広域調査～

林 真衣 久田 唯心 干場 真歩



ポスターの PDF
はこちら



教員からのコメント

・能登半島の様々な河川において、能登半島地震・豪雨災害の前後の魚類相を環境 DNA の網羅的解析で比較した研究は、学術的意義が高く、技術的にも高度な内容でした。クラスター分析や主成分分析の結果は大変興味深く拝見しました。一方で、2023 年と 2024 年の調査地点は重複しているのか、1996 年の魚類相を 2023 年・2024 年それぞれと比較するとどのような結果になるのか、また DNA の在・不在ではなくリード数を用いた解析ではどのような傾向が得られるのかにも興味を持ちました。

・環境 DNA、多変量解析など高度な分析手法を用いた点が評価できる。今後注目したい魚種の詳細も議論できた。

・森里海環境学との関連性を意識した研究であることに加え、ネットワークづくりまで視野に入られている点にも大きな可能性を感じました。今後のさらなる研究の発展を楽しみにしております。

京都府立海洋高等学校



循環型ゴミ社会 ～森里海繋がつているのは豊かさだけ？～

馬渡 悠太 近藤 勇樹 田中 優太 福井 葵
宮垣 了 栗田 慧治郎 松井 克樹 勢旗 悠太
今海 奏 村田 結子 竹田 利休 延尾 泰雅
森下 十粧



ポスターの PDF
はこちら



教員からのコメント

・身近な環境問題に着目し、自分たちのデータからごみの季節性を見いだした点を大変興味深く拝見しました。一方で、図が小さく内容を十分に読み取れなかった点は残念でした。今後は、季節性が生じる要因やその意味まで探究を深められると、さらに魅力的な研究になると思います。

・海ごみの多くは陸域で発生していることに着目し、海辺だけでなく内陸部でもクリーン作戦を実施している点を高く評価します。また、海浜調査から季節によるごみの量や種類の違いを分析し、その成果を地域住民と共有して、ごみ流出の抑制や清掃活動の発展につなげようとする実践的な取り組みが大変素晴らしいと感じました。

・ごみを通して陸域と海域のつながりを明らかにしようとするユニークな着眼点に、高校生ならではの優れた発想を感じました。また、特定のごみの量に季節変化があることを見いだされた点も大変興味深く拝見しました。今後は、季節変化に影響する海側の条件として、水位（潮位）との関係についても検討されると、さらに研究が深まるのではないかと思います。

京都府立宮津天橋高等学校



後世に繋ぐ環境作り～里山と川と海～

京都府立宮津天橋高等学校
フィールド探究部



ポスターの PDF
はこちら

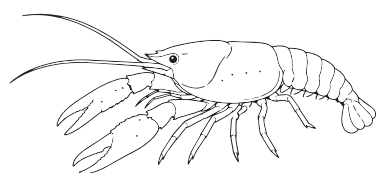


教員からのコメント

・『上世屋』をフィールドとして、里山、海、川の環境問題や環境教育に様々な取り組みをしており優れた活動をしている。

・海、川、山、それぞれのフィールドで個性的な活動を行っています。自分たちが楽しむだけでなく、子ども達と一緒に学習したり、図鑑を作製したり、生物調査結果を発表したり、より多くの人々を巻き込む活動に発展させている点が評価できます。

・様々な多様で重要な活動をされていて、とても感銘を受けました。多くの方に輪を広げ、こうした活動に持続的に参加・運営してもらうには、何が重要だと感じますか？活動の中で、難しいと感じたことや新たに発見したことなどを今後の発表でより詳しく聞くことができれば嬉しいです。



京都府立西舞鶴高等学校

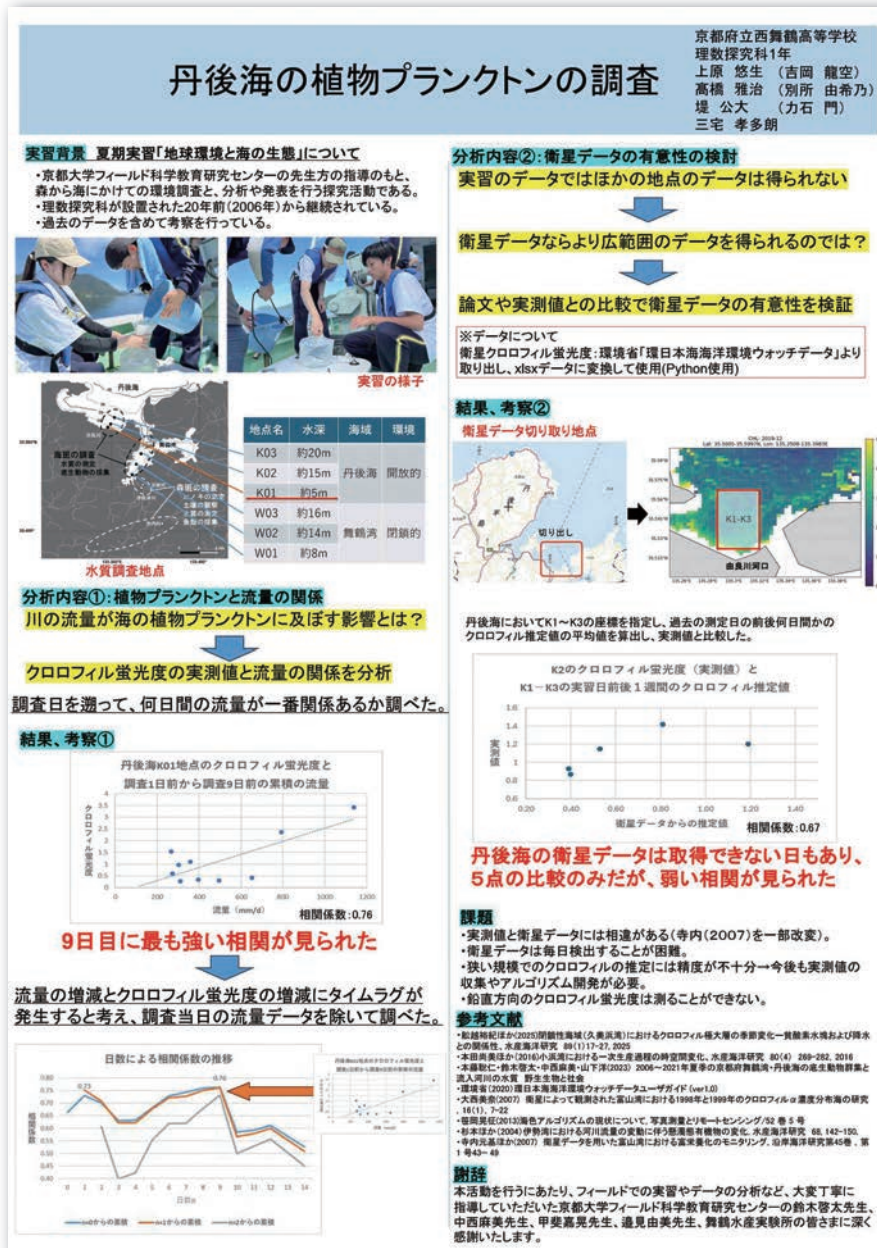


丹後海の植物プランクトンの調査

上原 悠生 高橋 雅治 堤 公大 三宅 孝多朗
吉岡 龍空 別所 由希乃 力石 門



ポスターの PDF
はこちら



教員からのコメント

・植物プランクトンは海洋の基礎生産を支える重要な生物であり、地球温暖化との関係からも注目されています。本研究では 20 年前からの長期モニタリングデータを活用しており、大変貴重で価値の高い研究であると感じました。

・写真とグラフを効果的に組み合わせた見やすいポスターで、結果にも納得感がありました。一方で、研究の目的や意義がやや伝わりにくく、河川流量との関係に着目した理由や、その結果が何を意味し、どのように活用できるのかまで考察されると、研究の魅力がさらに伝わると感じました。

・実習で得られた成果と外部データを比較しながら考察を進めている点を高く評価します。今後は、クロロフィルピーク時に優占する植物プランクトン種にも着目することで、さらに発展性のある研究になると期待しています。

京都府立洛西高等学校



巡れ！循環！！～地域とつながる高校生～

細見 周平 山崎 朱莉
山下 莉緒 植松 倖基



ポスターの PDF
はこちら

巡れ！循環！！～地域とつながる高校生～
京都府立洛西高等学校 洛再Links同好会

現在大量にモノを作って、大量にモノを捨てる大量消費社会になってしまっています。私たちは限りある資源を大量に消費してしまう事は「環境に良くない」「もったいない！」と思いました。モノの消費だけが問題ではありません。洛西高校周辺の地域では少子高齢化によるコミュニティの縮小が、地域の清掃活動や農家の方々への負担を大きくしています。そこで私たち高校生は環境に負荷のかからないサイクルである「循環」を作り出そう！、地域内外を問わずたくさんの人の役に立ちたい！と思い、様々な活動を行っています。

服の回収、無料配布
実際に校内で生徒に向けた服の無料配布も行いました！

生徒や保護者が着なくなった服を回収し、学校内だけでなく学校外のイベントでも無料配布しています！服をもらった人にはその服を寄付した人の顔はわからないけど、服を通して確かにその人たちの間には繋がりができていると思いました。

子供向けワークショップ
小さな子どもや小学生までたくさんの子供達が来てくれました！

使われなくなった廃材を使って子供向けのワークショップの運営を行っています！高校生がお客さんに現在の社会問題を伝えることで、その問題について知ってもらおうと同時に、若者から見た社会問題への解決策などを提案する機会になっていくと考えています。

堆肥作り
集めたタニシは燃やしてLinksで育てている畑に肥料として使っています！

客獣のジャンボタニシを獲って放置竹林の竹と燃やすことでジャンタケ肥料として活用したり、学校近くの落ち葉を拾ったりするなど地域の方々と連携しながら堆肥作りをしています。

まとめ 私たち高校生は、普段の学校生活で、使い終わったモノがどのように処分されているのかなどのモノの「循環」について学ぶ機会が少ないと感じていました。そんな中で、これらの活動を通して「誰かの不要なモノを誰かの必要なモノに変える」というのはもちろん、「環境問題について学んだことを別の人に伝えていく」ということも「循環」と言えるのではないのかと考えました。実際に京都大学フィールド科学教育研究センター土質試験地での活動では教授の方から植物の知識をたくさん教わりました。そこで学んだことを子どもたちに伝えるために、ゲーム感覚で楽しく学べるイベントを催しました。それだけでなく校内で行った「ドローンショー」や循環イベント「落サイクル」には今までお世話になった地域の方々や農家さんが来てくださりました。人とのつながり、活動の意義を改めて感じる事ができました。

和歌山県立海南高等学校



イシクラゲを肥料とした栽培方法

梶本 彩瑛 鈴木 亜衣奈 新宅 青音



ポスターの PDF
はこちら

イシクラゲを肥料とした栽培方法
Cultivation Method Using Nostoc commune as a Fertilizer
和歌山県立海南高等学校 梶本彩瑛 鈴木亜衣奈 新宅青音

背景
過去の本校生物部の研究である「シアノバクテリアの可能性」の研究内容からシアノバクテリアの一種であるイシクラゲ (Nostoc commune) に関心を持ち、食用化には十分に研究されているため、研究内容の一つであったイシクラゲ (自生) を肥料とした栽培方法を深く研究したいと考えた。

目的
自生のイシクラゲを用いて実際に植物を栽培し、肥料としたときの効果について評価する。また、イシクラゲの窒素固定能力を活用し、環境保全に活かせるようにする。

仮説
すりつぶすとイシクラゲと土の接地面が大きくなると考えたため、イシクラゲをすりつぶし土に混ぜたものが、手を加えずに土に混ぜたものよりも成長が早いと考える。

実験1
イシクラゲが植物の育成にどのような影響を及ぼすのか調べた。
次の5つの条件で小松菜の生育の違いを比較した。
①イシクラゲを土の上に置く (そのまま)
②イシクラゲをすりつぶし混ぜ込む
③そのままの状態のイシクラゲを土に混ぜ込む
④イシクラゲなし
⑤培養土 (イシクラゲなし)
①～④の条件では赤玉土を使用した。赤玉土は13g、培養土は65g土を入れた。温度25℃、光はLED、6:30～18:30まで点灯するように設定した。インキュベーター内で行う。イシクラゲを常温で1時間乾燥し、その後、30分間水につけて戻す。①～④の条件のポットをそれぞれ6個ずつ用意し、10gずつイシクラゲを入れた。1つのポットに対して5粒、小松菜の種を入れた。3週間の実験期間で、平日のみ2日に1回水やりを行い、毎日の観察を行った。イシクラゲなしの培養土はイシクラゲの効果と比較するために使用した。実験の後、土のリン酸、カリウム、硝酸窒素の濃度とpHを「あとりくん」を使い調べた。

実験2
イシクラゲなしの培養土はイシクラゲを使用し、65g入れた。実験1と同様に、温度25℃、光はLED、6:30～18:30まで点灯するように設定したインキュベーター内で行った。乾燥したイシクラゲを30分間水にさらした後、そのまま、すりつぶしたものを128℃で28分間オートクレープで滅菌した。①～④の条件のポットをそれぞれ5個ずつ用意し、10gずつイシクラゲを入れた。⑤の条件はポットを10個使用した。それぞれのポットに5粒ずつ、小松菜の種を入れた。実験期間は4週間毎日平日のみ2日に1回水やりを行い、毎日の観察を行った。イシクラゲなしの培養土はイシクラゲの効果と比較するために使用した。

実験3
前述の考察を検証するため、硝化菌の有無を調べることにした。この実験では、硝化菌の1つである硝化菌の有無を調べた。
培地組成 (1000mLあたり)
硝酸ナトリウム 1.0g リン酸水素二カリウム 0.5g
塩化ナトリウム 0.3g 硫酸マグネシウム 0.5g
硫酸マンガン (II) 0.002g 硫酸鉄 (III) 0.005g
pH 7.5
中量硝酸ナトリウム以外を溶解した培地をオートクレープで滅菌、その後重硝酸ナトリウムを添加した。
試料の準備
・赤玉土、培養土、イシクラゲ周辺の土を採取し、各1g測定 (1種類の土を2つずつ用意)
・蒸留水3mLを加え、攪拌 (2つのうち1つをオートクレープで滅菌)
・1mL三角フラスコにとり、培地を加えて100mLとする
・対照実験として、試料なしで水1mLに培地を加えて100mLにしたものを作成 (計7サンプル)
・それらを観察毎に蒸留水で1/1000に希釈。

結果
⑤の培養土が一番育っていた。ほかの条件にはあまり効果は見られなかった。このことから、今回の実験はうまくいかなかったといえる。また、リン酸、カリウム、pHには大きな差は見られなかった。硝酸窒素濃度は培養土のみ4.5 mg/Lで他の条件では検出されなかった。

考察
実験1の結果より、イシクラゲの窒素固定能力があったにもかかわらず硝酸窒素濃度 (NO₃⁻) の濃度が検出限界以下であったことから、主要な窒素源である硝酸窒素濃度の不足が、小松菜の成長促進が見られなかった原因の一つであると考えられる。イシクラゲが空気中の窒素をアンモニア窒素 (NH₄⁺) として固定した後、本実では硝化菌が硝酸窒素まで変換するはずだが、今回使った赤玉土では硝化菌が定着するに4週間ほどかかるため、アンモニア窒素が硝酸窒素に変わらなかったと考えた。

観察方法
実験開始日から3日に1回、バックテストで重硝酸銀度を測定する。値の変化を観察・記録する。
実験開始時の重硝酸銀度はすべて500～1000mg/Lだった。
維持される結果
赤玉土のものは、硝化菌がないと考えているので変わらない。培養土のものとイシクラゲ周辺の土は、硝化菌がいると考えているので減る。試料なしで水だけのもは、土を入れておらず硝化菌がないと考えているので変わらない。

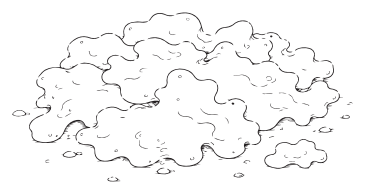
参考文献
近藤実直ほか 「イシクラゲの有効活用」
地下沙羅ほか 「シアノバクテリアの可能性 ～食用化・肥料化を目指して～」
アタリウム環境サイト トロピカ 「お水をきれにするバクテリアとは？」 <https://tropica.jp/news/2023/09/06/01>
何 R., Xiong Y., Qiong R. (2021) Characters of a Nitroreductase enrichment culture from a freshwater aquaculture pond. Biotechnology & Biotechnological Equipment 35:1343–1352.

教員からのコメント

・実験1については、期待した結果ではなかったとしても、今回の条件ではその結果自体に意味があった可能性があり、もう少し自信を持って考察されてもよいと感じました。一方で、実験3の結果が考察に十分結び付けられていなかった点は少し残念でした。今後のさらなる研究の発展を期待しています。

・シアノバクテリア (ラン藻) の一種であるイシクラゲを肥料として活用する着眼点が興味深く感じられました。期待した成果は得られなかったものの、実験結果を真摯に受け止め、その原因を考えながら次の検証につなげようとする姿勢を高く評価します。

・あまり目立たないイシクラゲに着目し、利用を試みた点がユニークです。



広島県立広島国泰寺高等学校



高水温がノリの色落ちに及ぼす影響の定量的解析 ～色落ち指標を用いた室内培養実験による検証～

井上 修佑 打明 直篤 中田 築希



ポスターの PDF
はこちら

広島県立広島高等学校



環境要因がアカハライモリの生息に及ぼす影響

松田 稜也 宇都宮 滉平
福馬 直人 羽白 優月



ポスターの PDF
はこちら

[illegible]

教員からのコメント

・近年の地球温暖化による水温上昇は、ノリの色落ちを引き起こし、品質や価格の低下につながる深刻な課題となっています。本研究はその要因の解明に取り組んだものであり、この問題の理解と対策に重要な知見を提供する研究として高く評価します。

・研究の背景や目的が簡潔に整理され、その後の結果や考察も分かりやすくまとめられていました。ノリの色落ちは複合的な要因が考えられる中で、本研究では光に着目して仮説を検証した点を評価します。明確な結果は得られなかったものの、それ自体が重要な成果であり、今後もさまざまな要因について検証を重ねることで、さらに研究が発展することを期待しています。

・ノリの色落ちという重要な課題をテーマに、計画的に実験を進め、分かりやすくポスターにまとめられていた点が印象的でした。今後は、栄養塩濃度と水温を組み合わせた条件で実験を行い、それぞれの影響や交互作用について検討されると、さらに研究が深まるのではないかと感じました。

[illegible]

教員からのコメント

- ・アカハライモリの食性を明らかにした点が大変興味深く感じられました。今後は、餌資源だけでなく捕食者の存在にも着目すると、分布の違いをより深く考察できると思います。
- ・また、在・不在の確認に環境 DNA を活用し、個体数の違いも検討されると、さらに研究が発展すると感じました。
- ・アカハライモリの生息環境について、水質や餌生物だけでなく、捕食者の存在という視点も取り入れて考察している点を高く評価します。
- ・アカハライモリの生息環境を明らかにするには、生息地と非生息地、あるいは生息地内でも個体数の多い場所と少ない場所を比較すると、環境要因をより明確にできるのではないかと感じました。また、胃内容物と地点ごとの環境 DNA を比較した点は大変興味深く、今後の研究の発展を楽しみにしています。

島根県立益田高等学校



金魚が群れを形成する条件

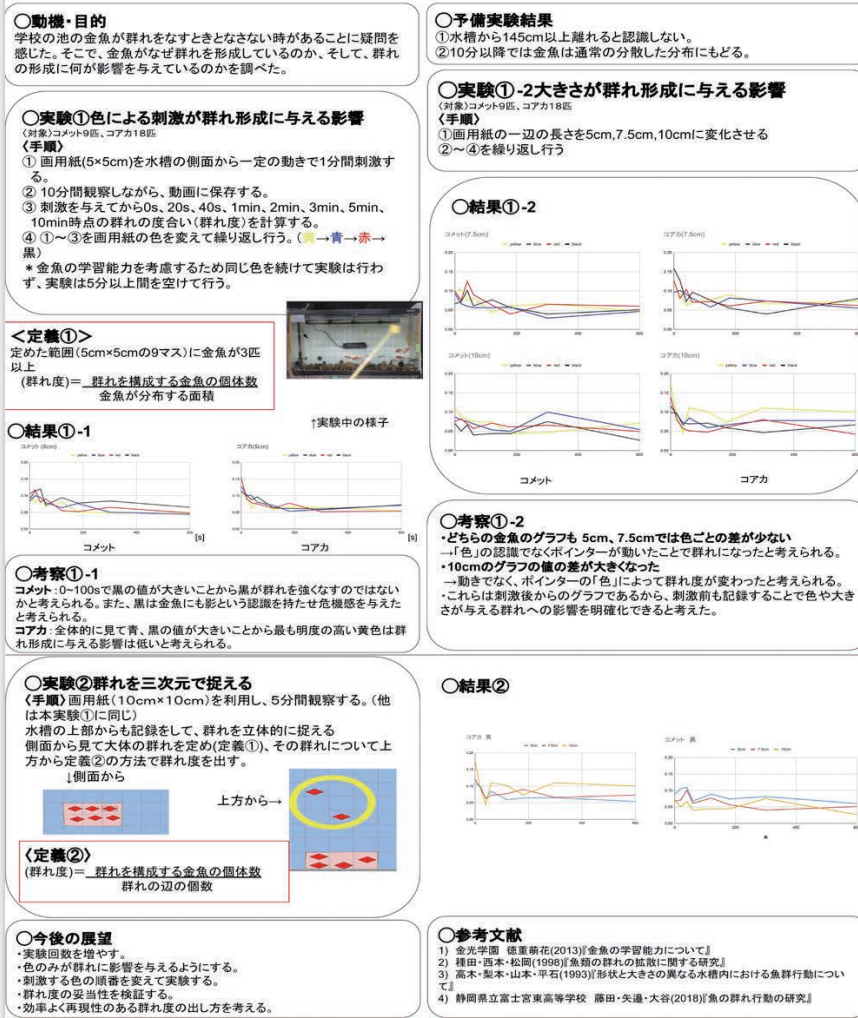
黒川 愛子 中村 詩音 前田 眞萌



ポスターの PDF
はこちら

金魚が群れを形成する条件

島根県立益田高等学校 2年 黒川愛子 中村詩音 前田眞萌

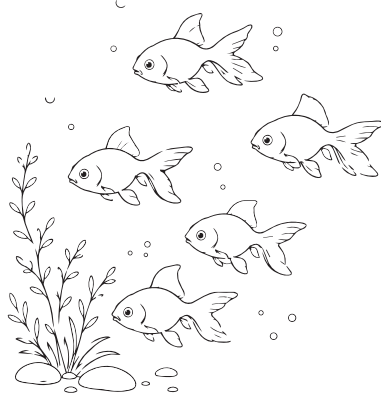


教員からのコメント

・金魚という身近な材料を用いて群れ行動について様々な観点から調べたもので、興味深い内容である。

・いつも観察している金魚のわずかな行動の変化に着目した点が評価できる。森里海の観点からのアピールは弱めだと感じた。

・身近な動物の群れ行動への興味から、計画的に実験を進められた点が大変素晴らしいと感じました。今後は、定点カメラなどを活用して池での行動観察も行うことで、さらに研究が深まるのではないかと思います。



山口県立徳山高等学校

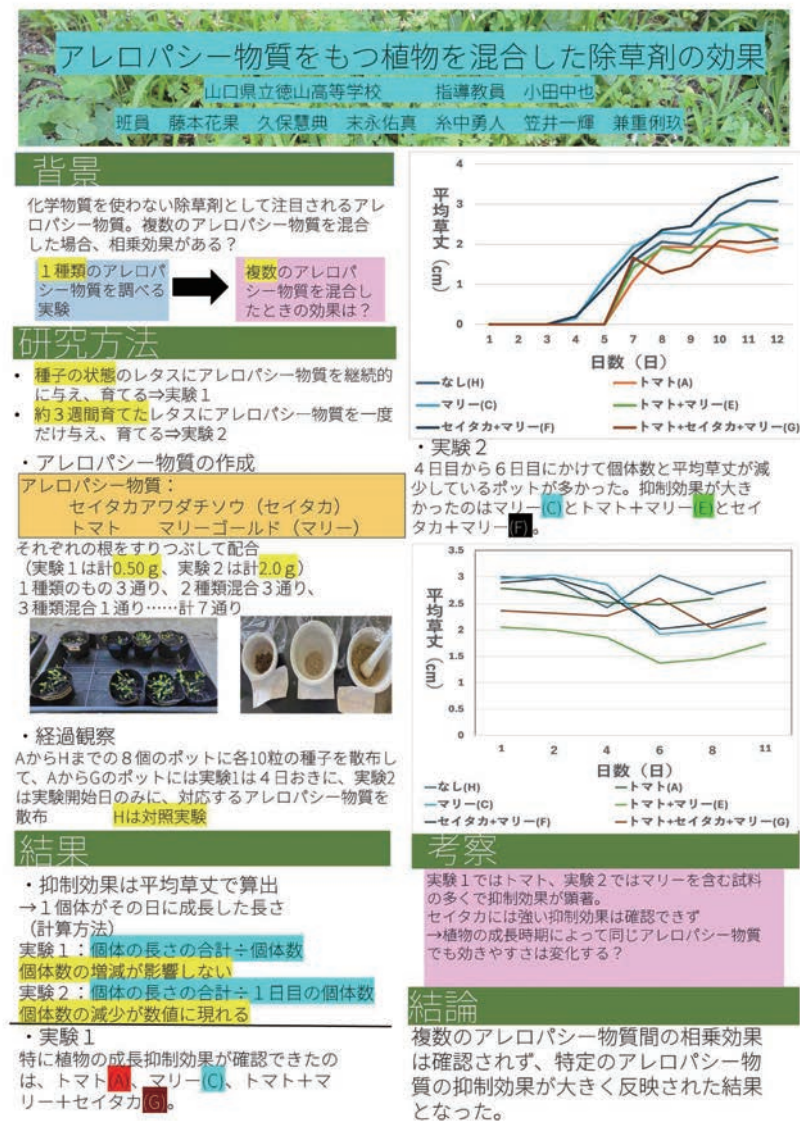


アレロパシー物質をもつ植物を混合した除草剤の効果

藤本 花果 久保 慧典 末永 佑真
糸中 勇人 笠井 一輝 兼重 俐玖



ポスターの PDF
はこちら



教員からのコメント

・雑草の多様性という学術的な視点から、防除効果と環境負荷の両面を考えた着眼点が大変興味深く、今後の発展が期待される研究だと感じました。今後は、草丈だけでなく死亡率も評価し、生存した個体の草丈とあわせて解析すると、より説得力のある研究になると思いました。

・冒頭でアレロパシーについて簡潔に説明があると、その後の内容がより理解しやすくなると感じました。また、アレロパシー物質の添加量が適切だったのかも気になりました。結果ではセイタカのためのグラフや個体数の変化を示すグラフもあると、さらに分かりやすい発表になると思います。

・研究の問いから結果、考察まで分かりやすくまとめられていました。トマトのアレロパシーが初期成長に影響し、その効果が成長段階によって変化するという結果が大変興味深く感じられました。今後は、レタスの成長にどのような違いが現れたのかも詳しく示されると、さらに理解が深まると思います。

愛媛県立西条高等学校



西条市千町地区における 訪花性カミキリムシの生態調査

石川 奏依 越智 健仁 國廣 みらい
合田 萌愛 中野 亜美 花山 宇梗



ポスターの PDF
はこちら



教員からのコメント

・訪花性カミキリムシは花の受粉を担う重要な昆虫であり、その生息状況を調査した本研究は大変興味深く、意義のある取り組みであると感じました。

・調査頻度が分からず、調査日によるばらつきの影響が気になりました。複数日にわたって調査を行うことで、より信頼性の高い結果が得られると思います。また、個体数の推移は積み上げグラフではなく、年ごとに分けて示すと、変化がより分かりやすくなると感じました。

・興味深い発表をありがとうございました。1 樹種につき 1 本のみの調査では偶然の影響を受ける可能性があるため、複数個体を対象に調査すると、より信頼性の高い結果になると感じました。また、訪花性カミキリムシは種によって好む樹種が異なる可能性があるため、樹種ごとの種数や個体数を比較すると、さらに興味深い結果が得られるのではないのでしょうか。

福岡県立伝習館高等学校

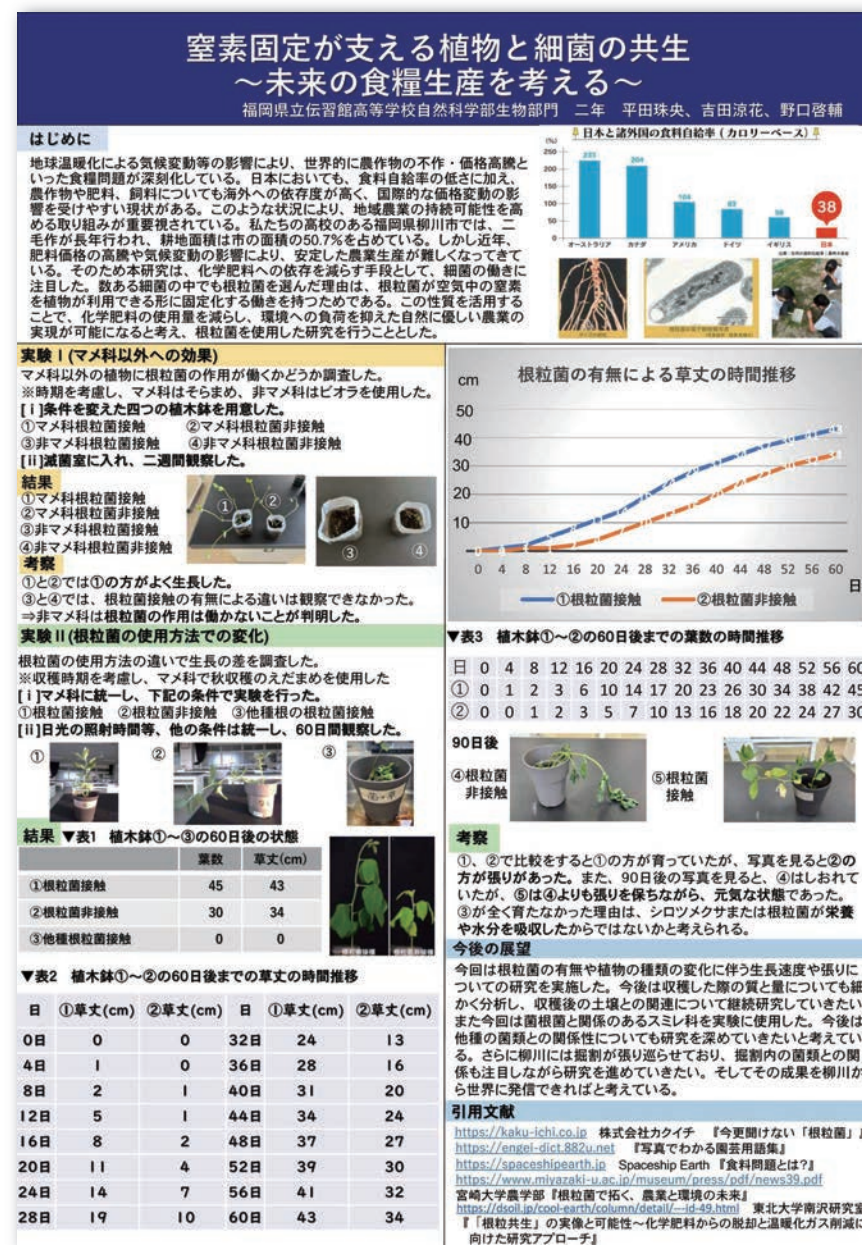


窒素固定が支える植物と細菌の共生 ～未来の食糧生産を考える～

平田 珠央 吉田 涼花 野口 啓輔



ポスターの PDF
はこちら



教員からのコメント

・丁寧な実験を進められており、大変よく取り組まれていると感じました。今後は、マメ科植物による窒素固定など実際の農業とのつながりも意識しながら、食料生産への貢献という視点で研究を発展させると、さらにインパクトのある研究になると思います。

・写真やグラフを効果的に用い、60 日間にわたって継続的に計測された点を高く評価します。一方で、実験方法の説明がやや不足しており、処理内容やデータが単独個体が平均値かなどが分かると、結果をより理解しやすく、説得力のある発表になると感じました。

・気候変動や肥料価格の高騰といった農業の課題に対し、根粒菌の活用という具体的なテーマで研究を進められた点を高く評価します。結果の整理やポスターデザインも分かりやすく、研究内容がよく伝わりました。

福岡県立山門高等学校

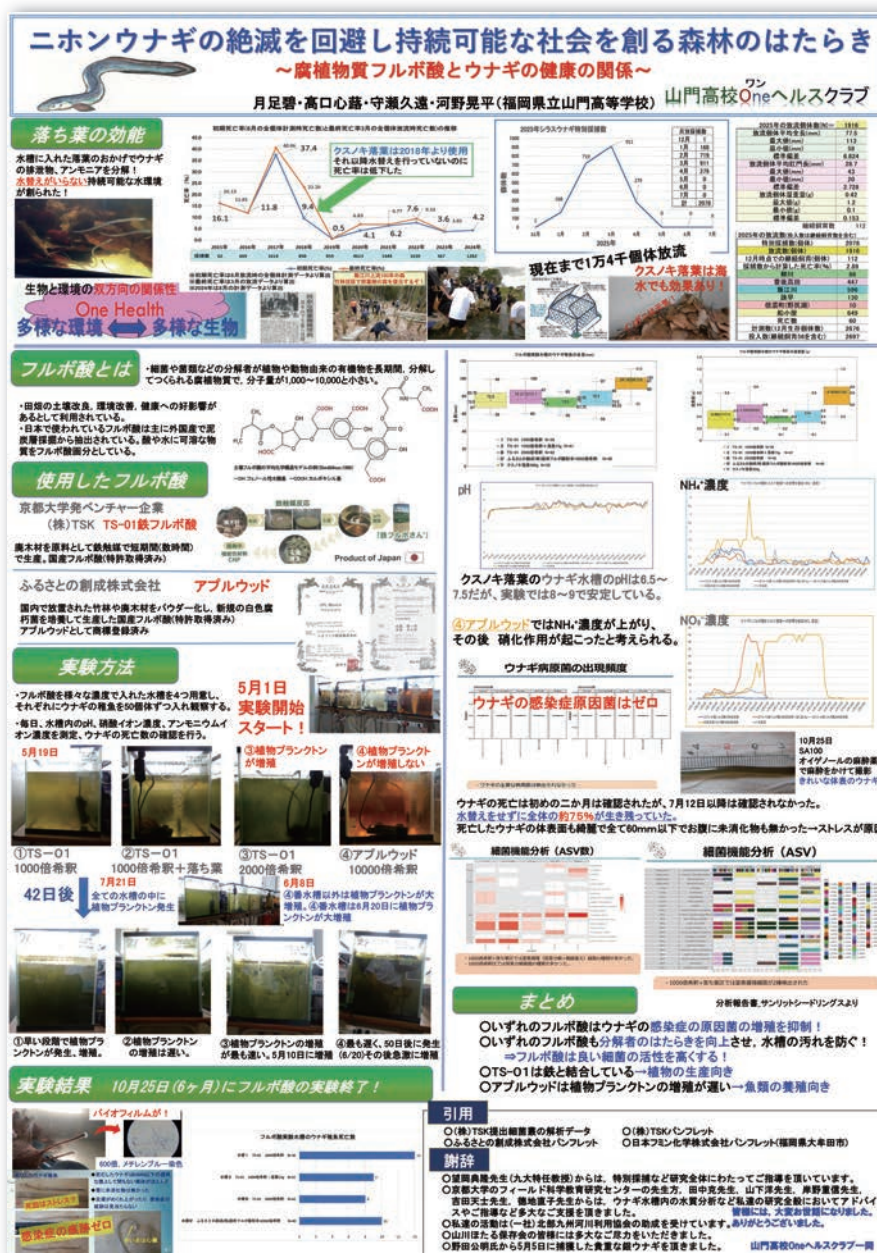


ニホンウナギの絶滅を回避し 持続可能な社会を創る森林のはたらき ～腐植物質フルボ酸とウナギの健康の関係～

月足 碧 高口 心路
守瀬 久遠 河野 晃平

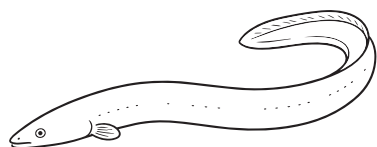


ポスターの PDF
はこちら



教員からのコメント

- ・ウナギは古くから日本人にとっての重要な食材であるが、フルボ酸がウナギの生存に与える影響について詳細に調べたことは、とても興味深い研究成果である。
- ・よく整理された分かりやすい研究でした。各濃度で落ち葉の有無を比較できる実験設計にすると、より説得力が増したと思います。今後は広葉樹と針葉樹の落ち葉による違いについても調べると、さらに興味深い研究になるでしょう。
- ・企業連携を活かした興味深い発表で、目を引くデータが多く示されていました。一方、対照実験がないため客観的な評価が難しく、比較対象を設けるとより説得力のある研究になると感じました。



高校生と大学生による 「森里海交流会」

京都大学フィールド研 教授 徳地 直子

森里海連環学を通じた持続可能社会の共創をめざし、私たちの暮らしと身近な風景との関係を考えるワークショップを京都大学旧演習林事務室（ラウンジ）で開催しました。高校生と大学生・大学院生が一緒になって、「残したい風景」をテーマに暮らしの中で心に残る風景や大切にしたい風景を振り返り、その理由や背景を考え、さらに、そうした風景を将来に残すため、これからどのような暮らし方や関わり方が求められるかを話し合いました。

参加した高校は翌日の森里海シンポジウムに参加する高校のうち8校（東京都立八王子東高等学校・岐阜県立古城高等学校・石川県立七尾高等学校・京都府立洛西高等学校・山口県立徳山高等学校・愛媛県立西条高等学校・福岡県立伝習館高等学校・福岡県立山門高等学校）です。

参加者は5班に分かれ、「残したい風景」について地域の景観保護やその意義について議論しました。参加者からは、日常の何気ない風景にこそ特別な価値が宿っており、お祭りなどの文化行事を通して地域への理解を深めることが重要だという意見が出ました。一方で、風景を維持する上で地域の活動を継続する必要性に対して、後継者不足といった課題があります。地域の負担にならないよう、変わりゆく現状と保存のバランスをどう取るかという難しさについても指摘がありました。これらは参加した生徒や学生が環境や現状に関して深い洞察を行っていることを示していると思います。そして、参加者たちはこれまで学習し、体験してきたことに基づいて、ここでは地域の魅力を再発見し、未来へ向けて愛着を育むことが「残したい風景」を残すことにつながると結論づけました。地域の魅力などという文言は外から聞く機会があったかと思いますが、考察の上ででてくる自分の言葉として使っていくことで、地域や環境の課題が自分事になっていくのではないかと感じる会でした。

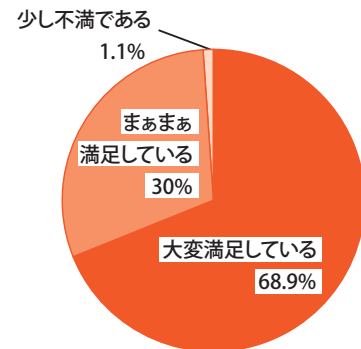


第10回森里海シンポジウム アンケート結果

全体アンケート

回答数90名

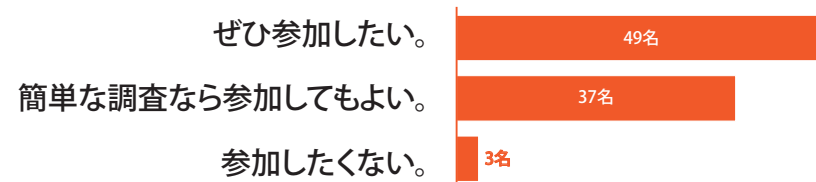
Q1 本シンポジウム参加への満足度をお答えください。



Q2 里山里海活動に参加する目的を教えてください。

- 1位 里山里海の保全の力になりたい (40名)
- 2位 里山里海の景観を保ちたい (32名)
- 3位 自然に触れあいたい (31名)
- 4位 知識を得るために (30名)
- 5位 子供の環境教育・自然教育のため (24名)
- 6位 ネットワークを広げたい (21名)
生き物が好き (21名)
- 8位 もともと里山里海活動に積極的に参加している習慣がある (11名)

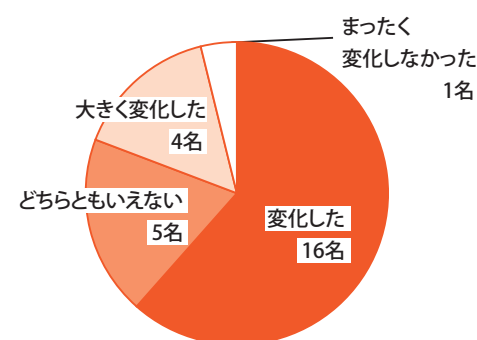
Q3 京大フィールド研が実施する里山里海の研究に、ご自身の地域から参加、協力したいと思われますか？



一般アンケート

回答数26名

Q4 本シンポジウムに参加して、里山里海に対する気持ちに変化がありましたか？



Q6 前から森里海のつながりを感じていますか？

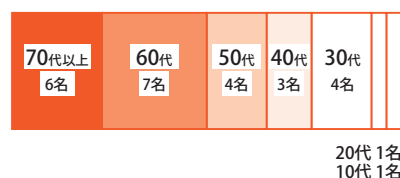
69.2% とても感じている

30.8% 少し感じている

Q5 具体的にどのようなことを感じましたか？何でも自由にご記入ください。

- 里山里海が、日常の身近な存在に思えてきた。
- 里山里海が私たちの暮らしの基盤であることを再認識した。
- 小さなことでも続けていくことが大切だと感じた。
- 森里海のつながりをデータに基づいて理解することができた。
- 自分の地域での取組を記録し、発信していくことの重要性を感じた。
- 地域ごとの特性に合った「環境ものさし」という考え方が興味深かった。

Q7 あなたの年齢は？



Q8 あなたのご職業は？

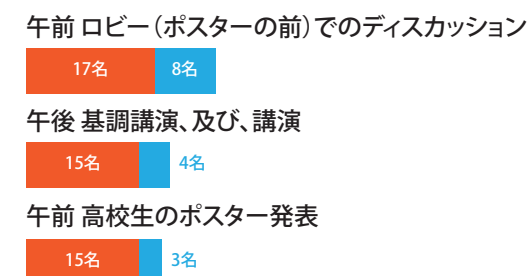
- 1位 会社員
- 2位 公務員 / 自営業
- 2位 大学生
- 2位 定年退職
- 6位 団体職員
- 6位 専業主婦

高校生・先生 アンケート

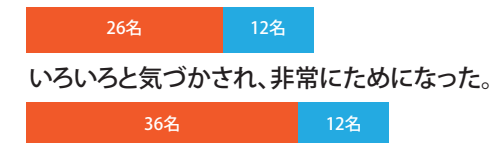
生徒
先生

回答数
生徒 47名
先生 17名

Q9 参加したものの中で一番楽しかった／面白かった／よかったものは何ですか？



Q11 午後の講演について非常にわかりやすく、好感が持てるものであった。



いろいろと気づかされ、非常にためになった。

Q12 このシンポジウムの前後で、「森里海のつながりや環境」に対する考えは変わりましたか？（生徒たちの考えは変わりましたか？）

- 1位 森里海のつながりの魅力や課題を発見できた。 38名 / 16名
- 2位 森里海の未来について不安になった。 7名
- 3位 特に変化はない。 1名

Q13 このシンポジウム参加後に、あなたが抱いた森里海連環の未来を教えてください。

- | 生徒 | 先生 |
|---|--|
| 今の私たちの行動がとても大切だと感じた。 | 参加した生徒が森里海連環について自分でできることを考え探究し、それをより広げるために周囲を巻き込んでいく未来。 |
| 人と自然が共存しながら持続可能な形で守られていく未来を実現するために、若い世代の関わりが重要になると感じた。 | まずは森里海のつながりや生物多様性の大切さに気づくことができたということが、価値ある体験だったと思います。これが今後の行動につながっていけるかが未来を作る上で重要だと思うので、引き続き情報提供しながら見守りたいです。 |
| 地域ごとにその地域に合った取り組みを行い、その小さな輪が世界中に広がることで自然も人間も持続的に生きることができるようになる。 | |

Q14 本シンポジウムに参加して、里山里海に対する気持ちに変化がありましたか？具体的にどのようなことを感じましたか？

- | 生徒 | 先生 |
|-------------------------------------|--|
| 森里海を保全していくためには身近な所から変えていくことが大切と思った。 | 森里海が互いに影響合っていることを具体的に知り、自分たちの生活とも深く関わっていると実感した。 |
| | ネイチャーポジティブという言葉さえ知らなかったのですが、今回学ばせていただいて、ウチの地域で子どもたちと何ができるだろう？と考えていました。話題提供していただいた先生方の研究がどれも面白かったので、参考にして何か次年度は生徒とやってみたいと思いました。 |

Q15 その他、ご意見・ご感想などございましたらご記入ください。

- | 生徒 | 先生 |
|---|--|
| 今回初めて森里海シンポジウムに参加させていただきました。やはり、様々な県の方々の研究内容を見て、研究を頑張る高校生は全国にいと再認識できました。私は、今回は発表していませんが、これからも実験を続けていきたいと思っています。 | ポスターセッションでの多数の方からの貴重なご意見をいただけたことはもちろんのこと、貴重な講演を拝聴させていただきまして、生徒の今後の更なる成長につながるきっかけとなりました。今後ともぜひ、継続していただきたい活動であり、参加させていただきたいと考えております。ありがとうございました。 |
| | 貴重なシンポジウムへ参加させていただいたことに感謝しております。生徒たちはますます探究活動に前向きになると同時に、賞をいただけたことによって全校生徒が興味を示してくれるようになりました。ありがとうございました。 |



スタッフ・発表者

開会挨拶

フィールド科学教育研究センター センター長 館野 隆之輔
公益財団法人イオン環境財団 専務理事兼事務局長 山本 百合子

講演

京都大学地球環境学堂・学舎 准教授 浅野 悟史
株式会社森を織る 代表取締役 小森 優美
フィールド科学教育研究センター 助教 山守 瑠奈
フィールド科学教育研究センター 特任助教 八柳 哲
環境省 自然環境局 自然環境計画課 課長補佐 辻田 香織

閉会挨拶

フィールド科学教育研究センター 副センター長 益田 玲爾

(シンポジウムプレ企画 高校生森里海研究ポスターセッション)

北海道釧路湖陵高等学校、東京都立八王子東高等学校、神奈川県立生田高等学校、岐阜県立古城高等学校、石川県立七尾高等学校、京都府立海洋高等学校、京都府立宮津天橋高等学校、京都府立西舞鶴高等学校、京都府立洛西高等学校、和歌山県立海南高等学校、広島県立広島国泰寺高等学校、広島県立広島高等学校、島根県立益田高等学校、山口県立徳山高等学校、愛媛県立西条高等学校、福岡県立伝習館高等学校、福岡県立山門高等学校

オンライン配信

株式会社響映 相川 健太
土山 公仁子

グラフィックレコーディング

スタジオポコ 吉田 友子

森里海交流会(企画、ファシリテーター)

京都大学農学研究科 助教 時任 美乃理
京都大学地球環境学堂・学舎 准教授 浅野 悟史
京都大学地球環境学堂・学舎 修士2回生 森山 円香
フィールド科学教育研究センター 教授 徳地 直子
フィールド科学教育研究センター 特任講師 田中 拓弥
大阪産業大学建築・環境デザイン学部 准教授 赤石 大輔
農林水産省農林水産政策研究所 主任研究官 法理 樹里

審査員

フィールド科学教育研究センター 准教授 石原 正恵
特任教授 朝倉 彰
准教授 中野 智之
准教授 鈴木 啓太
講師 坂野上 なお
講師 河村 真理子
助教 小林 志保
特任助教 小井土 凜々子
公益財団法人イオン環境財団 専務理事兼事務局長 山本 百合子

スタッフ

フィールド科学教育研究センター 教授 徳地 直子
准教授 市川 光太郎
特任講師 田中 拓弥
助教 邊見 由美
特任助教 横部 智浩
技術係長 横田 盤
技術主任 中村 はる奈
支援職員 川崎 茜
非常勤職員 川上 諒
派遣職員 對馬 朋子

おわりに

今回で第 10 回となった森里海シンポジウムには、北海道から九州まで 17 の高校から 70 名の生徒さんが京都大学に集まりました。この時季に開催されている選抜高校野球の 1/3 程度の規模、と言って良いでしょう。早めに到着した学校は前日の交流会から、また他の学校も加わり当日の午前中のポスターセッションで、大いに盛り上がりました。

今回のシンポジウムでは「身近な自然を見つめなおす」をテーマとして掲げました。これに寄せた発表を各校でご準備いただいた、ということもあるのかもしれませんが、それぞれの地域で身近な題材を、高校生らしいアプローチで研究していることに感心しました。

科学研究に取り組む高校生はエネルギーに満ちていますが、それを受け止め、導く顧問の先生方のご尽力にはいつも頭が下がります。そんな引率の先生のお一人が、私どもの主催した大学生向け公開実習の「卒業生です」と挨拶してくれたのも、教育の連鎖を感じられて嬉しい場面でした。

京都大学フィールド研 副センター長 益田 玲爾

今回は基調講演として、京都大学地球環境学堂・学舎の浅野悟史先生に「環境ものさし」の話をさせていただきました。動植物を通して地域の環境を知ろうとする試みは、おそらく人類が有史以前からとってきた行動と考えられます。花や鳥に季節の移ろいを感じる日本人には、とりわけ馴染みやすい考え方であるように思います。

基調講演に続いての、京都大学フィールド研と関わりの深い方々からのご講演、そしてフィールド研の若手研究者からの研究発表も、身近な自然とのつながりを考える上での示唆に富んだ内容であったかと思います。

イオン環境財団とフィールド研の協働で進めてきた「新しい里山・里海共創プロジェクト」は 2026 年 4 月に 2 期目に入りました。これからもさらに多くの出会いと発展をもたらすであろう本プロジェクトの結節点としての森里海シンポジウムに、今後ともご期待ください。